丹後活動プランの推進に向けて

バブル崩壊といわれ、かつてない長期不況におそわれた時代、それは同時に我が国の経済・社会の構造的変化が急速に進んだ時代であり、今なお私たちの社会はその変化の途上にある。海外市場の動向は直ちに地域経済に影響を与え、人、もの、情報の動きは加速され、またその範囲は飛躍的に拡大し、産業や就業の基礎条件を変え、更に急激な少子高齢化は経済や財政、そして地域の成り立ちをも変えていく強い動因となっている。

変化は摩擦を生み、また可能性を開くが、それらの対応は地域の条件によって当然異なる。しかも多面的な変化が急速に進んでいる現在の我が国においては、戦後作り上げてきた制度や手法、横並び的な発想では、限界があることが明らかになっている。このような時に、時代の流れに翻弄されるのではなく、その中に地歩を固めるには、何よりも自らの立地条件を知るそれぞれの活動体や地域が、主体的に行動していくことが求められている。京都府は、現地・現場主義を掲げ、権限を強化した広域振興局を新たに編成し、いち早くこの課題に取り組んでいる。

宮津市から京丹後市久美浜町に至る京都府丹後広域振興局の活動区域は、その中に様々な特質を持つ各地を包含しつつ、「丹後」という共通の地域認識のもとにある。丹後では、織物業、機械金属業、農林漁業、観光・レクリエーションなど、様々な事業活動が組み合わされ、生活の基盤を形成している。それらには蓄積された技術とともに、新たに開発され工夫された分野やノウハウがある。そして何よりも、変化に富み、人々を魅了して止まない海と山と集落、これらが一体となって構成する景観、季節の移り変わり、随所に息づく歴史と文化、温泉など丹後という地域自体がもっている魅力がある。

このプランは、丹後のもっているものを伸ばし、拡げ、新たな視点を加え、これを通して、「持てるものを誰もが生かせる」「丹後は今日も活動している」という主体的な地域づくりを提案するものであり、京都府は、民間、公共を問わず、広く丹後の活動主体とともに、このプランを推進し、丹後の新たな時代を共有したいと考えている。

このプランは、丹後で活動している多くの人たちや組織、また丹後に関心を持っていただいた学識経験者の皆様の御意見・提案をベースに組み立てたものであり、私たちが今問題と意識していることからスタートしている。従って、変化の激しい現在の状況のもとで、プランの射程は当面３～５年程度の期間である。

プランは丹後にかかわる主要な分野の今日から明日へ向かう方向を提示しているが、その背後には集中ディスカッションなどで明らかにされた具体的な数々のアイデアがある。それらを巻末に紹介しており、多くの皆様にこれらが活用され、あるいはこれらをヒントに更に新しいアイデアが広がっていくことがプランの原動力となる。

京都府全域を対象とする「新京都府総合計画」及び「「人（にん）・間（げん）中心」の京都づくり５つのビジョン（新京都府総合計画実現のための中期ビジョン）」は、このプランのベースであり、三者が一体となって丹後の発展を推進していく。

第1 丹後とは

丹後は、京都府の最北部に位置し、日本海に向かって伸びている丹後半島を中心に、東は舞鶴市、西は兵庫県豊岡市、南は福知山市、大江町、兵庫県但東町に接する面積約840㎢の地域である。半島の東と西には、それぞれに長大な砂嘴（さし）を持つ宮津湾と久美浜湾があり、南には大江山連峰、中央には東北から西南に斜に伸びた丹後山地が連なり、東から権現山（ごんげんやま）、太鼓山、依遅ヶ尾山（いちがおさん）、金剛童子山（こんごうどうじさん）、磯砂山（いさなごさん）など、標高500m～700mの頂を持ち、その中央部を竹野川が流れる。経ヶ岬を北端として半島の東西を囲む総延長約300kmに及ぶ海岸線は、東側の急崖の続く断層海岸やリアス式海岸に対する白砂のロングビーチなど変化に富み、京丹後市網野町を境に、東側は若狭湾国定公園、西側は山陰海岸国立公園に指定されている。また、平野部は、北近畿最大の由良川をはじめ、大手川、野田川、竹野川、福田川、佐濃谷川、川上谷川などの流域や海岸沿いに分布している。

▲依遅ヶ尾山

▲経ヶ岬

気候は、四季の変化に富んだ日本海型気候であり、夏は気温が高い日が続き、晩秋から冬にかけて「浦西（うらにし）」といわれる北西または西よりの季節風とそれに伴う時雨現象となり、不安定な天候となる。冬季には、平野部でも50cm、山間部では１mを超す積雪がみられることもある。

丹後に人が住み始めたのは約１万年以上も前と推定されており、約2,000年前の弥生時代には、京丹後市久美浜町の函石浜遺跡で、中国の「新」の時代の貨泉が発見されたように、大陸や朝鮮との交流が活発に行われていたと考えられる。また、３世紀後半からの古墳時代の遺跡として、日本海側最大の京丹後市丹後町神明山（しんめいやま）古墳、同網野町銚子山（ちょうしやま）古墳、加悦町蛭子山（えびすやま）古墳などをはじめ5,000基以上の古墳や貴重な遺跡などが数多く分布し、丹後は、いわゆる「丹後王国」と言われるように、「大和朝廷」に比肩する独自の繁栄を遂げていたとみられる。

記録では、奈良時代の713年に丹波国から分かれ丹後国として独立し、天橋立を望む現宮津市に国分寺が置かれた。鎌倉時代の丹後半島一帯は、京都守護職（後の六波羅探題）の管轄となり、室町、安土桃山時代を経て、江戸時代に入ると、宮津藩、峰山藩と田辺藩（現在の舞鶴市）の三藩に分割され、さらに江戸中期以降は、幕府の天領として久美浜代官所が置かれている。明治維新の一時期には、久美浜県が先に置かれ、廃藩置

県による宮津県、峰山県、舞鶴県を経て、1876年には京都府に統合された。現在は、2004年（平成16年）４月の合併により新市として誕生した京丹後市と宮津市、加悦町、岩滝町、伊根町、野田川町の２市４町で構成されている。

地理的には、京阪神から概ね100km圏内にあり、京阪神と結ぶ京都縦貫自動車道（久御山町～宮津市）と近畿自動車道敦賀線があるが、このうち前者は、「綾部～宮津間」と「京都丹波～京都間」で供用開始されている。また日本海側を鳥取まで結ぶ鳥取豊岡宮津自動車道では、宮津～野田川間の工事が進められている。更に、地域では、国道176号、178号、312号、482号とこれにアクセスする地方道が主要な道路交通体系となり、これに加えて第３セクターの北近畿タンゴ鉄道宮津線がほぼ東西を横断し兵庫県豊岡市と舞鶴市を結び、宮福線が宮津市と福知山市を結んでいる。

丹後の人口は、2000年（平成12年）に117,559人であり、長期的な人口減少と高齢化が進み、1970年（昭和45年）の140,186人から16％の減、65歳以上の人口比率は、この間に11％から26％に上昇した。主な産業は農林水産業、織物業、機械金属業、観光業などであり、就業者数は、その約半数が第３次産業で、年々増加する傾向にある。これに対して第２次、第１次産業の就業者は、年々減少の傾向にあり、それぞれ約39％、9％となっているが、府平均より依然として高い。

主な産業の動向をみると、農業では、農家戸数約7,000戸、過去30年間で半減したが、農業粗生産額は114億円（平成12年）で30年前に比べて約60％増となっている。近年、京野菜などの園芸作物の生産が増加しているものの、全体としては稲作を中心とした兼業経営が多い。なお、平成14年度に完了した国営農地開発事業により、宮津市と京丹後市合計で53団地約500haの農地で、飼料作物、葉たばこ、加工契約野菜、果樹等が栽培されている。

森林面積は、約64,000haで総面積の約75％を占め、その大半が民有林で、人工林率は府内平均を下回り、経営規模は零細で農業や他産業との複合的な経営が大半となっている。平成15年度の林業粗生産額（素材、樹苗、特用林産物等）は約１億５千万円で、素材は、主に京都丹州木材市場や兵庫県市場に出荷されている。

沿岸には、天然礁が散在し恵まれた漁場があり、四季を通じて多くの魚介類が水揚げされている。特に、「間人（たいざ）ガニ」は、漁場が近いことから新鮮なズワイガニとして、有数の高級ブランドとなっており、また久美浜湾では、カキの養殖が、栗田湾、宮津湾などでは、トリガイやイワガキなど新たな養殖の試みが行われている。

和装需要の長期にわたる減少傾向のもとにあるが、今なお年間百万反を超える白生地を生産し、「丹後ちりめん」をはじめとする絹織物の産地としては全国一の規模であり、また、かつて織物にも関係していた機械金属業は、今や自動車やＩＴ関連の部品生産にシフトし、地域を支える重要な産業となっている。また、商業では、スーパー形式の小

売店舗に加えて、交通利便性の高い地域には、大規模店舗の立地も進んでいる。

日本三景「天橋立」をはじめ、日本海に面した由良、奈具海岸や経ヶ岬、琴引浜、小天橋などの景勝地、伊根の舟屋、古墳公園やちりめん街道など多くの観光資源に恵まれ、夏は海水浴客が、冬は「かに」を求めて多くの人が訪れ、丹後全体で年間約630万人の観光入込客がある。また、丹後の各地域では、伝統的な季節の行祭事なども多く、また他方では、地域おこしを目的とするイベントやスポーツ競技、更に新たに整備された施設では、文化芸術関係の展示、発表なども行われている。

▲ちりめん街道

丹後を長く支えてきた基盤は、農林水産業と機業であった。戦後、急速に進んだ我が国の産業構造の変化と経済成長の過程で、丹後からも多くの若者が、新たな就業機会を生み出した第２次・第３次産業が集中する都市部へ流出していった。この間、機業は国民所得の向上を背景とする着物ブームの中で西陣・友禅の問屋と連動して生産を拡大し、丹後の経済力の維持に大きな役割を果たしてきた。しかし、長期的に低減する和装需要と主流である家内工業的な生産体制のもとでは、丹後全体の基幹となる就業の機会を提供するには至らず、人口の減少と高齢化は進んだ。

しかし、構造的な変化が進む中で、農林水産業においても機業においても、新たな経済環境に対応した様々な工夫が続けられており、また製造業では新分野に挑戦してきた機械金属業が独自の集積を築き、観光・レクリエーション関連では全国的に知られた天橋立を軸に、海水浴、カニ、温泉とその分野を広げてきた。これらはすべて、明日に向けての丹後の貴重な資源となっている。

これらを生かして丹後の魅力を開花させるためには、地域の中での努力とともに、より多くの人々が丹後に関わりを持ち、その中から新たな活動の芽をつくっていくことが必要である。このため、このプランでは、まずそれ自身、域外との交流を要素とし、世界的にもこれからの主要な産業分野とみられ、丹後がその大きな可能性を持ち、他の産業等との関連も深い観光・レクリエーションを最初に取り上げ、次いで農林水産業、織物・機械金属業等地域産業、そして生活・地域づくりに関係する事柄をテーマとし、最後にこれら全体を支えうる主要な基礎条件に触れることとしている。

第2 活動方策

1 観光・レクリエーション分野

丹後には、栗田半島、由良海岸、天橋立、経ヶ岬、丹後松島、鳴き砂の琴引浜、夕日が浦、久美浜湾等変化に富む海岸線、大江山連峰、磯砂山、世屋高原、宇川をはじめ緑豊かな山々や高原と清流、各所に湧出する温泉など魅力あふれる自然がある。また、「丹後王国」と呼ばれ、大陸との交流や先進的文化を実証する古墳群、丹後七姫など数多くの伝説と歴史・文化、さらに豊かな農林水産物や優れた技術に培われた丹後ちりめんなど人々を引きつける数々の素材がある。

丹後の観光では、万葉の古来から和歌に詠われ、雪舟の天橋立図に描かれた日本三景「天橋立」とその周辺の景勝地巡りが圧倒的なウエイトを持ち、これに加えて夏期の海水浴が各地域の主流であった。昭和40年代になると、以前から各旅館で提供されていたゆでカニに加え、カニすき、焼きガニ、カニさしなどが加わり、60年代には丹後一帯の冬の重要な観光メニューとなった。また、50年代には、各地で温泉掘削が行われ、海岸部では民宿から本格的な旅館へと拡大し、平成に入ると公共主導による温泉施設整備が進められ、カニと温泉は丹後観光の新たな要因となった。

▲クアハウス岩滝

一方、昭和60年代後半より、山間部を中心に都市農村交流を目的とする農林漁業体験実習館や総合交流施設、公園、農産物加工直売施設などが整備され、平成になると道の駅、丹後あじわいの郷、丹後ちりめん歴史館など各地の拠点的な観光関連施設の整備が進んだ。

他方では、艇庫と住まいが一体化した伊根の「舟屋」が地域の風土に根ざす独特の建造物群として高く評価され、また京都の大学等による丹後地域文化オープンカレッジや宮津市里波見の地球デザインスクールによる自然環境や地域文化を対象とした活動、太鼓山の風力発電、更に近年では漁業体験も海業として注目を集めている。

▲伊根の「舟屋」

この間、丹後地域へのアクセスは、昭和63年の宮福鉄道（現 北近畿タンゴ鉄道）「宮福線」の開業、平成８年の天橋立～福知山間の電化・高速化、同15年には京都縦貫自

車道綾部宮津道路の開通などにより改善され、京阪神圏からの時間距離は大幅に短縮されてきている。また、地域内交通網についても、丹後半島を周回する国道178号をはじめ、176号、312号、482号や主要地方道の整備も進みつつあり、出石、城崎、豊岡等但馬観光圏との交通網も整備されてきた。

このような丹後の知名度を高め、誘客を促進するため、昭和62年に丹後観光キャンペーン協議会が設置され、官民一体となって広域的な情報発信や広報宣伝、イベントなどを推進し、とりわけ、環境をテーマとした「はだしのコンサート」や、カニを食材にとどめず資源保護の観点からとらえた「カニ・フォーラム」などは大きな反響を呼んだ。平成12年には、拡充・再編した丹後広域観光キャンペーン協議会として新たな活動を開始し、四季型・滞在型観光地として、京阪神をはじめ、中京圏や首都圏へのプロモーション活動などを進めている。

丹後への観光入込客は増加を続け、昭和から平成に至る時期には年間500万人台であったが、平成15年には約630万人となった。しかし、このような増加傾向は近年足踏み状態になり、長期にわたる不況の影響も否めないが、海外や国内各地との競合の激化、人々の価値観や生活スタイルの変化を考慮すると、これまでの延長線上に丹後の未来を描くことには大きな疑問がある。丹後がその魅力を発揮して多くの人達との楽しく豊かなかかわりを発展させていくことを目指し、社会の動向を頭に入れて丹後の可能性を広く点検していく必要がある。

1　丹後の新たな魅力を引き出していく

自然には尽きない魅力がある。季節、天候、時間、見る角度によって、あるいは私達が求めるものが、楽しむ、学ぶ、挑戦するなどによって、海、海岸、崖、山、丘陵、林、樹木、草地、清流、温泉など自然を構成する要素はその姿を変えていく。また、過去から現在に至る丹後の歴史、人々の活動、集落や街並みなど人間の営みを表すものにも、その見方、関わり方、楽しみ方によって、尽きない魅力がある。丹後では、いずれも多様性に富み、独自のものも数多く、次のような検討・工夫を加えて新たな魅力を引き出していく。

▲久美浜小天橋

（砂嘴（さし）、断崖など美しく興味深い自然を有する半島）

①　丹後の海岸線は、自然の造形のおもしろさと美しさを示す砂嘴による天橋立と久美浜小天橋が東端と西端に位置し、その間に海に切り立った壮大

な断崖と広大な砂浜、そして水際を楽しめる岩場で構成されている。我が国では類例のない、また世界にも極めて少ないこの海岸線を全体としてとらえ、景観と自然学習の面から打ち出していく。

（自然のダイナミズムを感じさせる冬の厳しい海と温泉・豊かな食物との対比）

② 冬の丹後の海、次から次へと押し寄せる波、逆巻く怒濤、変化する風と波の音など、人間の力を超えた自然のダイナミックなパワーを体験できる機会として生かしていく。穏やかな雰囲気に包まれた温泉と豊かな食物との対比を味わうことも魅力となる。

（「海の駅」や海の道などによる交流拡大）

③ 宮津湾、伊根湾や久美浜湾など波のおだやかな水面をシーカヤックやヨット、ボートで巡り、また海から変化に富んだ海岸線や街並みを楽しむ。また沿岸部の各地を結ぶ「海の駅」をつくり、丹後半島を巡るクルーズ航路の設定や日本海沿岸部との海の道による交流を拡大する。更に、水上マーケットなど海を生かした販売の工夫をする。

（日本の原風景的魅力を持つ山里、清流）

④ 山間部には、針葉樹と広葉樹のコントラストに包み込まれた清流と山里が点在し、そこはまた伝説と歴史の舞台でもあり、その先には依遅ヶ尾山のように陸の先端を想わせるような独特な稜線や、海への眺望が広がる頂がある。詩情豊かな半島という地形の中にあり、多くの人々に故郷を感じさせるこれらの集落とそれを取り囲む自然は、日本の原風景的な魅力を持っており、これらを体感できるルートと機会をつくっていく。

（様々なテーマによる歴史・文化の楽しみや追体験）

⑤ 丹後はかつて大陸との交流の拠点であり、古く我が国の国家形成期には、丹後王国と言われるほど大きな勢力を形成し、先進的な文化を築いてきた。久美浜函石浜（はこいしはま）から出土した中国古代の新王朝（西暦８～23年）の貨幣「貨泉」、日本海側最大級の網野町銚子山、丹後町神明山、加悦町蛭子山の古墳など歴史のミステリーを解く様々な鍵があり、更に、天女、浦島太郎、安寿、徐福などにまつわる伝承や物語、小野小町、静御前、細川ガラシャに関する史実、また天橋立と雪舟、宮津・三上家、久美浜・稲葉本家、加悦・尾藤家をはじめ江戸期から明治にかけての建造物とそこでの生活など、

様々なテーマに沿って歴史や文化を理解し、追体験できるエリアであることを全体像として示し、個別ルートを工夫していく。

（農と食、織物等生産面の魅力）

⑥　丹後には生産面でも大きな魅力がある。

農林水産では、沿岸部の砂地を生かしたハウス栽培、大規模な開発農地と新作物の導入、高品質の果樹や水稲の改良、棚田の保全、牧場と畜産、水産資源の先進的な保全と開発など、様々な活動がある。これらは周辺の自然の中にあって、独自の景観を構成し、また食品の安心安全を楽しく学べる場所でもあり、そして何よりも新鮮で豊かな食材とバラエティに富んだ料理を生み出す源泉であって、これら農林水産業自身が観光資源である。他方、丹後あじわいの郷をはじめ、数多くの宿泊・料理関係施設、都市農村交流施設、青少年関連施設が丹後にはあり、それらとの連携を、それぞれの特質や目的を明確にして組み立て、対外的にアピールできる形にしていく。

ものづくりでは古代に端を発する絹織物、特に独特な風合いをもつ品質の高いちりめん製品、またそのルーツは織物にも関連があった自動車やＩＴ関係の機械金属加工分野での集積がある。このような大規模な生産力が丹後半島を中心とするエリアにあること自体が興味の対象となるものであり、織物では時代の変遷の中での隆盛と苦境、新たな展開に向けての努力、機械金属加工ではその集積が産業立地論に一石を投じるものであることなど、それらは人々を引きつけ、製品に対する関心を高める大きな力となり得る。見る、体験するに加えて、この面からの工夫を生産と観光の両面に生かし、丹後の存在感を高めていく。

（温泉と海と森林の結びつきによるリフレッシュエリア）

⑦　丹後の大きな可能性を開く要素として、温泉と海と森林の結びつきがある。丹後には170を超える（府内の９割以上）温泉施設があるが、それらは個々の旅館やホテル等の内部施設か、あるいは主に地元の人達の憩いの場としての利用に限られている。21世紀のキーワードの一つは「健康」であると言われているように、身体の健康とともに心の健康、精神的なストレスから自由であることを多くの人が求める時代になっている。温泉がこれに効果的であることは論を待たないが、海洋療法（タラソセラピー）と言われるように、海水の成分や海水の浮力を利用した治療、リハビリ、健康増進に加えて、海岸を歩き、海風に吹かれるなどもストレス解消に効果的に作用し、また既に広く知られている森林浴では、樹木の香り、小川のせせらぎ、木々を渡る涼風などが心身をリラックスさせ、森林セラピーとして注目されている。

丹後には、これらすべての要素があり、また薬草の宝庫でもある。各地域の特徴を

生かしてそれらを統合し、相乗的な効果とバラエティーを楽しむことができるエリアとしていくことが可能である。更に、前述の自然や歴史、文化、食、生産などの組み合わせにより、より豊かなリフレッシュエリアとしての構成もできる。丹後の力を結集し、これらを追求していく。

（自然共生・循環型社会システムの体験、学習）

⑧　丹後には優れた景観を構成する海や山が各所にあり、また宮津市上世屋・大宮町内山のブナ林など植生として貴重であり、また美しさを持つ森林も多い。このような自然が人間の手によって大規模に痛めつけられた象徴的な事件として、沖合いを航行するタンカーからの重油流出事故があった。鳴き砂で広く知られている琴引浜をはじめ、丹後の海岸部一帯を覆った重油の除去に、全国からボランティアが集まり、必死の努力を続ける地域の人々と力を合わせ、美しい海岸を取り戻すことができたのであり、丹後は環境学習の場ともなった。

廃校舎を基地として、自然との様々な関わりを楽しみ学ぶ、宮津市波見の地球デザインスクールには、近畿一円から参加者が集う。新たなセミナーハウスを核に、子供達が自然の中で冒険をし、風を感じ、星を見る、また子供だけではなく青年も大人も園芸や農業を体験し、森林に親しむ、このような活動ができる広大な京都府「丹後海と星の見える丘公園」が地球デザインスクールの発展形として生まれつつある。

一方、伊根町太鼓山には西日本最大級の風力発電施設が稼働し、隣接する弥栄町エリアでは、我が国のモデルとなる先進的なエコエネルギーの複合実証プラントの整備が新たに進められている。

▲太鼓山風力発電施設

円筒形の回転翼をもつ風力発電、廃棄物をエネルギー源とするバイオガス発電、太陽電池や多方面の用途が期待される燃料電池を構成要素とする発電システムは、自然に対する負荷を軽減し、循環型社会の基盤となるものである。

これらの拠点的エリアの周囲には、「風のがっこう京都」をはじめ宿泊機能を持つ自然体験施設、農村都市交流施設が整備され、海を隔てた栗田半島には、青少年海洋センター「マリンピア」が活動している。丹後は、21世紀の重要な課題である“自然との共生”“循環型社会の形成”を、豊かな自然の中で、様々なテーマやルートを通して楽しく体験し、リラックスして学べる魅力的な地域であることを広く打ち出していく。

（ランドマーク天橋立と西の入口久美浜）

⑨　天橋立は丹後のランドマークであり、全国からこの名勝を目指して観光客は訪れる。

その流れは、南に位置する京阪神方面からのものが圧倒的に多く、海岸沿いに半島を進む場合や、また半島中心部へ進む場合も、丹後の東に位置する天橋立・宮津市から進み、その多くは再び天橋立・宮津市を経由して帰路につく。

▲天橋立

他方、半島の西側と隣接する豊岡市は人口４万７千人を擁する兵庫県北部の基幹都市であり、雄大な円山川沿いの市街地中心部は京丹後市久美浜町から10km程度の距離にある。また豊岡市の北に位置する城崎町には、全国的に著名な城崎温泉があり、年間100万人を超える観光客が訪れるが、同じく久美浜町からは10数kmの距離に過ぎない。それにもかかわらず、これら城崎、豊岡、出石を巡る多くの観光客が丹後半島西側から丹後を回遊する例は極めて少ない。

しかし、西側から丹後への入口となる久美浜は大きな魅力を持っている。東の天橋立に呼応するかのように久美浜にも美しく一直線に伸びた小天橋と呼ばれる砂嘴があり、静かな水面をたたえる久美浜湾と果てしない外洋へ連なる外海とを区分している。かぶと山（192m）山頂の展望台からの眺望は、眼下の区画整理された水田と集落と森、その先に箱石から浜詰に伸びる海岸線と一体となって、例えようもなく美しい。また山麓一帯は公園としての整備が進み、キャンプ場や様々な活動に利用できるホール等があり、外海には広大な砂浜が広がる。一方、久美浜湾に面する市街地は、明治初期に久美浜県の県庁所在地でもあり、街道とその両側に連なる民家、そして湾へ流入する掘割で構成され、中心部に位置する豪壮な旧稲葉本家邸宅は、明治時代から昭和に至るこの地における大規模な経済活動を象徴している。更に湾岸部には新たな機能を展開できる埋立造成地が出現している。

▲久美浜湾

このように丹後への西からの玄関口である久美浜には様々な魅力があり、これを磨き広くアピールし、城崎等へ訪れる観光客の目を丹後に向け、丹後へ誘引していく。久美浜から網野、丹後、伊根を経由し、あるいは峰山、弥栄、大宮を経由して、宮津、野田川、加悦方面へ抜ける大きな流れをつくり、東からの流れに合わせて、様々な魅力が、ぎっしり詰まっている丹後を回遊できるようにしていく。

２　魅力を開花させる基盤を整えていく

（観光戦略の基本の点検）

①　観光は、今や全国各地で地域経済を支えリードする産業とみなされているが、他方では、観光客の視野は国内のみならず海外にも及び、その市場は、無数にある観光サービスの供給者と数多くの観光地を体験している観光客を需要者とする厳しい競争構造になっている。

　このため、各地域において、それぞれの観光戦略の基本となっているものを明確にし、人と資金を重点的に投入していくことが必要であり、まずこれまで観光資源としてきたものについて、その地域内部での評価や楽しみということだけでなく、地域外のどのような階層の人に、何をアピールしようとしているか、他の地域の同様のものとどう違うのか、時間と経費をかけて丹後でそれを見たり体験するだけの魅力があるのかなどの角度から、客観的に評価していくことが不可欠である。また一方では、これまで各地域で観光資源とみなされなかった対象を前記１の観点などから見直し、同様の評価を行うことが、新たな展開への基礎となる。

（中核となる活動体の形成とエキスパートの育成）

②　各地域における観光ポテンシャルの客観的な評価とそれを現実に生かす工夫とともに、他の地域又は他の対象との複合化によって、域外からの観光客誘引が可能であるかを点検していくためには、広く観光の全国的な動向と合わせて、丹後の地域事情を熟知しているエキスパートが必要である。特に丹後の場合は、前記１のように様々な可能性があり、同種のものを結びつけるルート、逆に異種のものを結ぶルート、楽しみと学習の組み合せ、対象としての海、山、清流、季節、食、産業、環境、集落、歴史、文化など、選択とコンビネーションの対象は極めて広い。これらを地域配置や交通手段、関連施設などを考慮して整理し、新たな観光エリアとして組み立てていくには、客観性と専門性を持ち、集中的、継続的に活動できるエキスパートは欠くことができない。

　これには、個人とともに組織としての活動体があり、現実的には特定のテーマを追求し、展開していく活動体を構成し、丹後と日本各地、さらには海外との競合を前提に、ビジョンを提示し、推進していく。その中で、知識と活動力を持った個人が育成されるという仕組みをつくっていく。このような活動体は永続的・固定的である必要はなく、丹後のエネルギーを集中できる規模であり、活動期間を選ぶ

ものであり、ここで活動した者は次の活動体のコアになっていく。

また他方では、丹後の観光面での多種多様な可能性を地域の人々が理解し、特に若い人達については、その可能性を開き、提案し、推進していく、このような力をつけ、場合によってはエキスパートになっていく機会を広げ、丹後自体を観光のプロのベースにしていく。

（基盤施設の整備と活用）

③　観光における基盤的な施設として、まず交通では、京阪神と結ぶ動脈形成が丹後の悲願であり、現実に京都縦貫自動車道の整備が観光客の流れにも影響を与えている。観光地の在り方として、日常生活圏域からの隔絶感が魅力の一つであり、日帰り圏域となることに対する疑問がある。しかし、京阪神地域からの地理的な位置、福井県との競合、城崎をはじめとする兵庫県側隣接地域とのルート形成などを考慮すると、京都縦貫自動車道並びに鳥取豊岡宮津自動車道は丹後と他地域を結ぶ骨格としての早期の整備が必要であり、これに関連する主要路線の整備と一体となって、観光のテーマに応じた様々なルートが開けていく。

また北近畿タンゴ鉄道は観光資源として大きな意味を持っている。環境への関心が更に高まっていく中で、鉄道は環境負荷の少ない交通手段であることが次第に評価されてきており、また環境や丹後の近代史など観光テーマとの関係で主要な役割を演じることも可能であり、これ以外にも観光テーマやルートとの関連を明らかにして、その役割を広げていく。

更に丹後の地形、交通密度の低さ、観光資源の多様性と広域分布を考慮すると、自動車、鉄道、バスそれぞれの可能性を最大限に発揮させる工夫とあわせて、それらの連携を地域や観光テーマを単位として具体的に検討していくことが必要である。また、兵庫県城崎や豊岡等、丹後の西側からの周遊には、久美浜から十数kmの位置にある但馬空港（豊岡市）も大きな可能性を持っており、具体的な観光テーマとルートを結びつけて丹後への活用の突破口を検討していく。

宿泊施設については、かつての丹後と比較すれば、民間、公共関連ともかなり整備が進んできたが、その主な動因となったものは、カニと温泉であったと思われる。しかし、それらは丹後だけのものではなく、他地域との競合が激しくなるに従い、改めて丹後が選択される条件を見直し、整えていく必要がある。個々の施設での工夫、特にベースとしての宿泊以外に何を付加するかは大きな課題であり、またその施設が、立地する地域の魅力、観光テーマとの関連で一層効果的となり得ることを思えば、各施設の立地地域

全体の条件整備が重要である。その整備の方向は一般論ではなく、各地域の観光戦略に基づいて選択し、重点的に取り組み、場合によってはカニであれ、温泉であれ、丹後全体の観光戦略の要となる条件整備も検討していく。

なお、特に公共関連の施設の場合は、当初の設置目的や立地地域を超えて、丹後の観光戦略の中で、どのような役割を担えるかという検討や、季節や利用形態に応じて価格体系を整えるなど弾力的な運用方法の検討を大胆に進め、活用範囲を広げていく。一方、民間施設の場合は、それぞれのポリシーに応じたサービスの組み立てと対応する価格体系を明確にしていくことが、その特徴を伸ばしていくことにつながる。

（効果的な情報提供・キャンペーン）

④　丹後の観光に関する情報は大きく二つに分けられる。まず丹後へいざなう情報であり、次に丹後へ降り立った後の情報である。

丹後へいざなう情報は更に二つに分けられる。一つはその時々のイベント情報であり、夏の海水浴、冬のカニ、各種の祭・行事に関するものであり、これまでのキャンペーン情報の主流をなしている。これらの情報提供は必要ではあるが、相互に関連のない断片情報では丹後がどういう所なのかというトータルのイメージの形成につながらず、また同時期の同種のキャンペーンが他の多くの地域で行われることからも、丹後の独自性が際立つという状況になく、域内からも聞かれる丹後のアイデンティティーは何かという疑問に答えるものではない。

これに対して丹後自身を様々な角度から系統的に紹介する情報があるが、古代史に関するもの以外は必ずしも一般化していない。しかし、丹後はまずその大部分を占める半島という特別な地形で自己主張ができ、またそこには、前記１のように美しさと不思議さを感じさせる自然と人間の営みがある。これをベースにして、丹後へ来ればこういうことができる、こういうことが学べる、こういう楽しみが味わえるというような系統的なトータルな情報を提供していくことが丹後に対する理解を深め、これらとの関連において上記のイベント情報は、より強く効果的になる。

このため、観光テーマに関連した情報を系統的に整理し、どのような階層に、どういう手段で情報を伝えるかを検討し、それぞれの観光テーマに合った情報提供やキャンペーンを進めていく。

一方、丹後に降り立った後の情報には、目的地へ至る情報や目的地及びその周辺の情報があり、交通、施設、イベント、天候等滞在者の利便性を増す様々な内容が含まれる。これらはそれぞれの地域において収集される情報が中心となるが、最新の情報を観光客が使いやすくわかりやすい形で提供していくためには、組織的な管理、運営が必要であり、各地域での体制や連携方法を検討し、改善していく。

（観光エリアとしての質的向上と魅力ある地域社会の形成）

⑤　観光に訪れた者の評価が、本来の観光目的の達成度合によるだけでなく、その地域自体の印象や地域の人々との関わりにも影響されることは誰もが経験するところである。街並みの美しさ、清潔さ、人々の親切、地域特有の生活の工夫や楽しみ、伝承などは、その地域を忘れ難いものにする。これらへの関心を高めていくことは、地域そのものの豊かさを増すことにもつながり、また一面では日常生活の制約を伴う外部からの流入は、地域の活気を生み出す要因となる。

景観の保全、わかりやすくセンスのある統一的な表示、障害者や外国人が安心して過ごせる環境、地元の人の話を聞いたり地元の行事を楽しむ機会など、地域として工夫し、改善できることは多く、これらへの取組を通じて観光エリアとしての質を高め、地域の人々にとっても魅力ある地域社会を形成していく。

2 農林水産業分野

丹後の農業も水稲が中心となるが、砂地や国営開発農地を利用した野菜園芸や果樹などの生産も各地で行われている。

水稲では、全国的な米の消費量の減少と他地域との競合が厳しくなる中で品質向上への努力が続けられ、農協が中心となり昭和47年に「丹後米改良協会」を組織し、肥料を集中的に投入する時期を工夫した丹後版「への字型栽培」実証圃を設ける等、乳白米対策と１等米生産に取り組み、また平成13年からは１等米を80％にすることをめざす京都ＫＯＳ１８０運動として緩効性肥料、遅植え、疎植などの取組を進め、平成15年には魚沼産コシヒカリに匹敵する「特Ａ」ランクの評価を得た。一方では、全国的な価格競争に対応して生産コストを低減するため大区画ほ場整備を進めると同時に利用権設定による中核的な担い手農家への農地の利用の集積も進められている。

排水性の高い花崗岩土壌や対馬海流など自然条件をうまく活かして、梨、ブドウ、桃などの果樹栽培やヤマノイモ、ショウガ、ストック栽培が行われており、平成８年から本格的に栽培を始めた京のブランド産品「みず菜」は、パイプハウスの整備や、講習会・現地検討会等を経て急速に栽培面積を拡大し、主要作目の一つとなった。

また、国営開発農地では、新規入植者による耕作も加えて、地域の畜産農家との連携による土づくりやブロック単位の休耕を組み入れた土地利用のローテーションなどによる葉タバコや果樹、野菜など大規模な畑作農業が行われ、大かぶなどでは加工契約栽培もみられる。更に最近では茶、アシタバ等の新規作物の導入も進められている。

▲かんしょの掘取り作業

一方、食品としての安全や環境を考慮した生産方法への関心が高まるとともに「エコファーマー」と認定される農業者や消費者への直接販売など、新たな動きも見られる。

林業では、長期にわたる木材価格の低迷などにより生産活動は停滞し、生業としての林業は成り立ち難い状況にある。地域の過疎・高齢化が進む中で、伐採後植林がされなかったり、間伐などの手入れがされず放置林となるなど、森林の荒廃が進んでいる。

森林は木材生産の場としてだけではなく、水源のかん養・土砂の流出防止、漁場への豊富な栄養源分の供給、更に二酸化炭素を吸収し地球温暖化を防止する役割も果たしており、その多面的な機能が注目されるようになっている。

従来は林内に放置されていた間伐材を利用した木製治山ダムの建設、木（竹）炭や木

（竹）酢液の生産、漁業関係者と都市住民による植林活動（漁民の森づくり）や間伐材の魚礁利用など新たな活動も進んできている。また、地域振興や林業振興はもとより、沿線の豊かな自然と各種誘客施設のネットワークを担う路線でもある丹後縦貫林道は、開設から20余年が経過し、現在、２車線化などの改修整備（リフレッシュ事業）が進められている。

畜産では、国際的な価格競争の中で苦境を強いられた肉用牛生産に対して、規模の拡大が進んだ酪農との違いはあるが、肉用牛においても畜産技術センター碇高原牧場のバックアップのもとで若手による経営もみられ、また酪農では乳牛のストレスを低下させるフリーストール牛舎など新たな技術の導入やアイスクリームなど乳製品の範囲を拡大する意欲的な経営も行われている。

水産では、安定した漁業生産を目指して、資源管理型漁業及びつくり育てる漁業を進めてきた。その中でも間人ガニ等で知られているズワイガニについては、全国に先駆けて漁業者が中心となって、資源管理を積極的に行い漁獲量の増加に結びついている。また、漁場・増殖場を造成するとともに、豊富な栄養分が供給される河川の流入や波の静かな内湾など丹後の海の特長を活かし、トリガイ、イワガキ、ホンダワラ等の環境にやさしい無給餌養殖を推進してきており、養殖トリガイではこれまでにない大型種の生産に成功し、丹後の特産品として定着しつつある。

▲トリガイの養殖開始サイズと収穫サイズ

一方、観光資源としての漁業に注目し、定置網や地引網などの漁業体験や、新たな水産加工品の開発などいわゆる海業としての事業を拡充し、漁業所得の向上と地域の活性化を推進していこうという活動も広がりつつある。

丹後では地域全体に進んできた農林漁業者の高齢化と過疎化に対して加悦町や大宮町などで早くから村づくり活動が展開され、その中には、全国的なモデルと評価される活動もあったが、リーダーの高齢化、共同作業化や財源面での困難などにより当初の活動の継続は容易ではない状況にあり、また都市・農村交流による地域活性化の拠点としての機能を持つ丹後あじわいの郷をはじめ各地の交流・体験施設をより効果的に活用していくことも課題である。更に、農地の遊休化、森林での生息環境の悪化などにより野生鳥獣の生息範囲が人里にまで拡大し、農林産物への被害のみならず生活の安全を脅かす事態も生じている。

このように、地域の人口の減少と高齢化、特に農林漁業を担う年齢層でのこの傾向は農山漁村の生活の場としての機能にも影響を及ぼしている。水稲や木材の例でも明らかなように、生活を維持する所得を従来の生産方式の中から得ることは困難となっており、一方では新たな品目の導入や生産方法の改良が進められているが、対応する市場の拡大は個々の生産者にとっては容易ではなく、新たな工夫が必要とされている。

1　自然とのつながりを基礎に生産活動と地域を支えていく

（地域としての一体的な活動の推進）

①　中山間地の農地・里山は、水源かん養や治山などの機能を担い、また野生鳥獣と人との緩衝地帯としての役割を果たしてきた。その維持には、道直し、草刈り、水路掃除等地域の生活と一体となった活動が必要であり、農林業の組織的な担い手の育成・強化とともに、地域の人々の日常的な活動を継続していく取組を推進する。

（ＮＰＯ等の参加拡大）

②　固有の歴史と景観を待つ棚田や荒廃化している森林の整備には、その地域だけでは困難な場合が多く、都市部との交流をベースにボランティアやＮＰＯの参加を工夫し、広げていく。

（生産の組織化、経営能力の向上）

③　産地間競争が激化する中で、産業としての農業を確立するためには、品質の向上と同時に生産コストの低減が必要であり、それには農地の利用集積と大規模ほ場の整備を更に進めるとともに、生産の組織化、法人化を拡大し、同時に消費者ニーズの多様化や流通の変化に対応した経営能力を高めていく。

（自然共生・循環型社会の基礎づくり）

④　木製治山ダムの建設をはじめ公共事業での木材利用や木質廃材の堆肥化などバイオマスとしての利用、間伐材による魚礁の設置などを拡充するとともに、松くい虫抵抗性マツの植栽や林道の整備・活用によって森林を再生し、またホンダワラ（神葉）等海藻の育成による海の森、海の畑づくりを進め、自然との共生、循環型社会の基礎をつくっていく。

２　新たな生産・販売チャンネルを開拓していく

（安心・安全、地域循環型の生産・消費）

①　冬のカニシーズンに大量に廃出されるカニ殻、畜産農家の畜糞堆肥、とうふ製造粕のおから堆肥等による土づくりを進め、化学肥料や農薬の使用を抑制し、消費者の安心・安全志向に応え、環境への負荷を軽減する地域での循環型生産・消費を拡大していく。

（エコファーマー等の努力が評価される価格形成）

②　生産者と生産方式を明らかにし、更に栽培状況を確認できる情報提供やツアーなどを通して、安心・安全でおいしい農畜産物の生産への理解を広め、エコファーマー等の努力が評価される価格形成を実現していく。

（高齢者による生産への工夫）

③　京の伝統野菜「みず菜」のように軽量で、高齢者による栽培管理も可能な作目を工夫し、作業条件を整え、拡大していく。

（新たな流通チャンネルの拡充）

④　農産物の大半は系統出荷され、中央卸売市場あるいは卸売業者に販売されてきた。個々の農家が直接市場に関わることには様々な困難があり、今後も系統出荷はベースとして必要であるが、一方では消費者のニーズを知り、生産に工夫をこらすことや、消費者の安全志向に対応して顔の見える生産者になることも必要となっている。このため、消費者との結びつきを多面的に検討し、地産地消の観点も入れて、朝市やインターネットを活用した直販、スーパーや生協、消費者との契約栽培、沿道直売、観光関連施設やツアーとの提携、農畜産加工などを加え、新たな流通チャンネルを拡充していく。

（地域材流通システムの整備と林産物の生産・販売の拡大）

⑤　地元産材の利用が森林の荒廃を防ぎ、また輸送燃料を削減して地球環境の保全に貢献することをウッドマイレージの取組などを通して広め、他方では、山元から工務店までの木材ストック情報や使用部材の規格統一など、地域材流通の広域的なシステムを整えていく。

豊かな広葉樹資源を活用した木（竹）炭や木（竹）酢液の生産や林内を利用した山採りのヒサカキ、シキミ等の枝物栽培などを進めるとともに、その販売ルートを広げる工夫をしていく。

（磯根資源の多角的利用、養殖の推進と流通チャンネルの多様化）

⑥　潜水漁法の拡充等により、サザエ、アワビ、ホンダワラなど磯根資源の多角的利用を進めるとともに、トリガイ養殖では、参画漁業者を拡大して、種苗量産体制の整備を行い、アワビでは、府栽培漁業センターで生産された無病アワビ種苗を増産し、いずれも海のブランド産品として伸ばしていく。漁獲物の集出荷・販売についても、農産物と同様に流通チャンネルを広げる工夫をしていく。

（丹後あじわいの郷の機能向上と海業等との連携）

⑦　地域の農林漁業と都市エリアとの接点として、基幹的な役割を果たし得るのが、丹後あじわいの郷であり、周辺の国営農地は農業体験や営農実習、さらにはロシアのダーチャ方式（農作業別荘）のように都市住民による相当規模の耕作エリアとしての活用も可能であり、また、食材の調理研修、農水産物の直販など様々な機能を高め、海岸部で推進される海業や山間部の農林体験施設での活動との連携も強化していく。

▲丹後あじわいの郷一帯

3　担い手・後継者を育てていく

（中核的担い手の活動力の拡充）

①　農業における認定農業者やエコファーマー、漁業における漁業士など、現に生産活動の中核を担っている人達の交流・連携を強め、生産や流通に関する最新の情報を提供し、その活動力を拡充していく。

（次代の担い手の育成）

② 将来の担い手、後継者の育成には、何よりも次代を担う地域の若者達が、丹後の農林水産業の特徴、その可能性と課題を知っていることが前提となる。このため、農林漁業を体験し、生産者と意見交換をするなど現実の生産活動に触れる機会を広げ、また小中学校段階では給食に地元産の米や野菜、鶏卵・鶏肉、水産物などを使い、地域の生産活動への関心を高めていく。

（新たな農林水産業参入者等への機会を開く）

③ 年齢層や職歴を問わず、農林水産物の生産や農山漁村での生活への関心が高まっていることから、就農希望者をはじめ、休日・休暇を野菜・果物等を栽培し自然の中で過ごしたいとする都市住民などが、様々な形で農林水産業に関わることが出来る機会をつくり、丹後における農林水産業の幅広い支援層を形成していく。この場合、特に丹後あじわいの郷の周辺の国営開発農地は、丹後にしかない基礎条件であり、その可能性を生かしていく。

（生きた知識・技術を学ぶ仕組みをつくる）

④ 地域の若者達の学習や農林漁業への就業希望者あるいは都市住民の農作業等に対する指導には、丹後の各地域で意欲的な生産活動を行っている農林漁業者や都市部からの先輩移住者が講師となり、山里における生活と生産、酪農や漁業の仕事の内容や進め方など、生きた知識・技術を学べることが出来る仕組みをつくっていく。